



発行所  
カトリック長崎大司教区  
本部事務局  
〒852-8113  
長崎市上野町10-34  
カトリックセンター内  
TEL 095(846)4246  
FAX 095(842)4460

## 節目のとき…広島・長崎

肥塚 倅司  
広島教区司祭

「せんそうは、にんげんのしわざです」と一語一語はつきりとした日本語で、広島のパワー・アピールを宣言された教皇ヨハネ・パウロ二世は、去る4月3日（日本時間）天に召されました。

1981年2月25日、小雪の舞う寒い朝、神の僕ヨハネ・パウロ二世は自らを「平和の巡礼者」と名乗り、人類史上最初の原子爆弾の被爆地広島を踏まれました。

故教皇は「平和アピール」の中で、広島と長崎を「その名前が永久に一つに組み合わされてしまったにちがいない二つの都市」と定義され、「人

間とは信じられないほどの破壊をやつてのけるものだという事を思い起こさせ、戦争こそ平和な世界を築こうとする人間の努力を一切無にするものだという事を、後世の人々に警告し続ける現代にまたとない都市として、永久にその名をとどめることでしょうか」と位置づけられました。

神からつくられた一人ひとりの人間に固有の召命があり、それぞれの修道会に特別のカルスマがあるように、「教区」にも独自の召命があるはずです。

あのとき教皇がいみじくも指摘されたように、「一つに組み合わされ

てしまった」長崎と広島両教区の召命は、「平和の使徒」となること、「平和を創り出す人々」（マタイ5・9）の幸いを生きることです。

今年、広島と長崎は被爆60周年という節目の年を迎えています。

1945年8月、長崎と広島に投下された原子爆弾は、人類の歴史の新しい始まりを刻みました。核兵器を発明した人類は、自らの手で人類と世界を破滅へと導くことを知ったのです。

「広島（長崎）を考えることは、核戦争を拒否することです。広島（長崎）を考えることは、平和に対しての責任をなうことです。」とのヨハネ・パウロ二世の呼びかけをしっかりと受けとめ、この記念すべき年に長崎教区と広島教区が力を合わせて「平和の使徒」としての使命を果たしていく第一歩を踏み出すことができれば、素晴らしいことです。

また、今年は、長崎の信徒発見140周年というもう一つの節目の年でもあります。

信徒発見に続いたキリシタンの迫害は、一村総流罪という「浦上四番崩れ」の悲劇を生み出しました。まず、1868（慶応4）年に、

浦上キリシタンの中心人物114名が、萩、津和野、福山へ配流されました。この三つの町はみんな広島教区に属しています。長崎教区と広島教区の摂理的なつながりを見るような気がします。

一年半後には、三千数百人の流罪が実施され、広島教区では、萩、津和野、広島、福山、松江、鳥取、岡山の7カ所へ移送されました。津和野乙女峠での「殉教」は、「浦上四番崩れ」を象徴するものです。信仰を守り通し生命をささげた36名、また高木仙右衛門や守山甚三郎は、「殉教」の原義である「キリストの証人」の使命を美しく全うしました。

「浦上四番崩れ」は、キリシタン潜伏時代の最後の迫害であり、基本的人権である「信教の自由」をめぐる戦いであり、明治以降の再宣教の始まりでもありました。

長崎の信徒発見140周年と被爆60周年という節目の年に、殉教者の精神を現代に生きる「キリストの証人」となる働きと「平和の使徒」としての活動を推進していくために、長崎教区と広島教区の交流と協働が目に見えるかたちで実現することを願っています。

# Q&A

## 「節目のとき……広島・長崎」



平和の巡礼者

Q・初めて来日されて長崎にまでおいでくださった教皇ヨハネ・パウロ二世がお亡くなりになったので、歴史の変わり目にあるとは感じますが、ほかにどんなことを「節目」として捉えているのでしょうか。

A・一面に広島教区の肥塚倅司神父さまが記しておられるように、まず被爆60周年ということがあります。信徒発見140周年もそうですし、また来年2006年は、日本に初めてキリスト教を伝えた聖フランシスコ・ザビエルの生誕500年、故ヨハネ・パウロ二世教皇来崎25周年であり、この2年を一連のものと思わずならば、「節目のとき」と考えることもできるのではないのでしょうか。

もちろん節目だからといって何かをしなればならないというわけではありませんが、この節目をうまく活用するのはとても大切なことだろうと思います。

Q・その「節目」を活用するために、具体的に何をしようとしているのでしょうか。

A・たとえば、8月8日の午後7時から、長崎県宗教者懇話会に世界連邦日本宗教委員会も加わって、原爆殉難者慰霊祭が爆心地で挙行されます。それから毎年のことですが、8月9日には平和祈願祭が行われます。今年NHKがこれを取り上げて世界に発信するということですので、被爆60周年に花を添えることになるでしょう。

それから、イスラエル・パレスチナ・日本の高校生たちが平和交流を行う計画も進められています。いま、世界の火薬庫といわれる国々に住む若人たちが、世界に向けての平和発信に最もふさわしい地で、直接向かい合い交流するのは、とても意義のあることだと思います。

竹は内側が空洞になっていて、外側だけで成長を支えています。きちんきちんと節目

を作ることによって、ねじれたりゆがんだりするのを防いでいます。

被爆60周年も、私たちが福音を生きていくうえで、同じような節目の役目を果たしてくれることを願っています。

Q・肥塚神父さまが「その名前が永久に1つの組み合わせられてしまったにちがいない二つの都市」という前教皇様の広島平和アピールのことを引用して、二つの教区に共通する特別の使命を説いておられますが、長崎教区はその特別の使命に広島教区と同じ程度に気がついているのでしょうか。

A・「広島・長崎の名が永久に組み合わせられた」というのは、もちろん両都市が世界でただ二つの被爆都市であるという意味のことばですが、長崎教区も、もちろんその特別の使命に気づき、平和の発信を試みているわけです。

けれども、それが社会運動という具体的な形に結晶しているかどうか、といえばまだまだ不十分と言えるでしょう。

故島本要司教さまが教区本部の改革のころしきりに言われていたように、「長崎らしい平和運動」を展開していく必要があります。

Q・その長崎らしい平和運動とは何ですか。

A・その具体的な形はこれから探していかなければなりません、基本となるのは、「福音に基づく」ということです。教会は政治運動に走ったり、抗議行動だけをするような団体ではありません。

人はときどき、平和の名のもとに他の国や他の人をけなしたり、正義の名のもとに人を裁いたりする矛盾に陥ることがありますが、十字架上のイエスさまのように、右の意見にも左の人の思いにも手を伸ばしそれらを結びつけながら、人間の真ん中におられる神の平和を求める努力を続けていく必要があります。

・・・・・・・・・・・・・・・・

Q・社会運動を実際にやるとどちらかに片寄ってしまいますので、教会はできるだけそんなことはしない方がよいのではないですか。

A・そのことについては、去る4月10日にカトリックセンターで、長崎の宣教委員会の中の「正義と平和推進部会」が開いた講演会の中で、松浦悟郎司教さまが問題提起をしてくださいました。それは、簡単に言えば、私たちの信仰体質の中に「天国に行く」ということだけが肥大化して、いつも主の祈りの中で「天国が来ますように」と祈っていることには気づかなくなっているのではないか、という指摘です。「天国に行く」ということであれば、自分一人で祈りをしていけばよい、という信

仰体質を生み出しかねない危険性があります。

「天国が来ますように」ということになる、イエスさまの愛が及んでいない、いろいろな人々や国や社会の現状が見えてきて、そのために何かをしなければ、という気になるのが自然ではないでしょうか。

・・・・・・・・・・・・・・・・

Q・ところで、新しい教皇様のベネディクト16世が誕生しました。これからも前教皇様と同様に平和運動を続けられるのでしょうか。

A・新しい教皇様の誕生にあたって報道各社からコメントを求められた高見大司教は、次のように述べておられます。

「ベネディクト16世という教皇名を名められた理由はまだ明らかにされておりませんが、1914年に教皇に選出されたベネディクト15世が、第一次大戦勃発間もないときに、平和のために尽くす一方、教会内の進歩派と保守派の間の無用な確執を戒めて中庸な道を選んだことが、混乱する現代世界にも当てはまると考えられて、この名を選ばれたのではと推察しております。」

ですから、平和運動はますます盛んになっていくだろうと思います。いわば運命的にその名が結びつけられた二つの都市・広島と長

崎の使命は、これからも世界から注目されていくことになるでしょう。

24年前に広島と長崎を平和アピール（広島）と殉教ミサ（長崎）で結びつけられた故教皇ヨハネ・パウロ二世のメッセージは、死してなお生き続けることでしょうか。というより、ますますその真価を発揮するようになるのではないのでしょうか。アジアの聖女・マザーテレサのメッセージも、死してますます輝きを放ち続けています。

長崎にはまた、「死の同心円」ともいうべき爆心地と、同じように死の風景のように見えて実は「いのちの同心円」ともいえる「至福の丘」（西坂公園）とを結びつける使命もあるのではないのでしょうか。

その具体的示唆を、肥塚神父さまが与えてくださっています。長崎のキリシタンが流された地は広島教区の各地に残っており、この二つの教区の結びつき、長崎の二つの同心円の結びつきへの願いの実現は、かつての殉教者たちの祈りに支えられながら、着実に進められていくに違いありません。



西坂公園



# み言葉の分かち合いとは (7)

## 韓国小共同体の視察旅行

### 参加者たちの感想文から

小共同体活動は、第2バチカン公会議の精神を移行に移すものとして、世界各地に広まっている。アジア地域では、アジア司教協議会連盟 (FABC) が「ASIPA (アシパ)」という実践プログラムを作成し、それを基にして各国独自

の内容に組み変えながら、16カ国で活用されている。その動きに最初から参入して大きな成果をあげている国の一つに、韓国がある。このたび、教区小共同体推進室では、①韓国の小共同体視察、②殉教聖地の巡礼、③休戦ライン訪

問の平和学習などを兼ねた視察旅行を、去る4月18日〜21日に実施した。

参加者は、高見三明大司教を団長に、鍋内師、盛師、修道女2名、信徒16名の計21名、それに札幌の修道女1名、信徒2名の計3名、東京の山内師 (聖パウロ会) と信徒1名の計2名、総計26名となった。訪問先は水原 (スウォン)、ソウル、議政府 (ウイジョンブ) の3教区の、教区本部や小教区であった。

今回は、視察旅行の内容と参加者たちの感想文を紹介してみたい。

#### 1. 水原教区の取り組み

\*水原教区は、ソウルの南に位置する衛星教区で、農村と工業地帯とが混在した地域にある。また、韓国教会の発祥の地であり、殉教関連の聖地が多い所でもある。

\*信者数の推移は下の表に見られるように驚異的な発展をしているが、それに付随してミサ参加率が年々減少するなどの問題点もあり、その対応策として「小共同体作り」が強力に進められている。

年	人口 (万人)	信者 (万人)	信者率 (%)	教区司祭数
1963	133	0.4	0.3	36
1974	186	6.7	3.6	62
1984	285	14.4	5.0	96
1996	525	39.7	7.5	187
2003	644	59.9	9.2	297

信者数の推移

\*水原教区の小共同体への取り組みは、1990年代中ごろからである。1998年から2001年まで毎年教区シノドスを開催して、教区司牧指針を「小共同体に基づく福音化」と決定し、その指針に従って教区・地区・小教区の組織改編を実施した。2002年から小共同体作りにも本格的に取り組み始め、現在はまだまだ着手段階にあるが、定着化の時期を2017年と想定して活動を展開中である。

\*班集会の実施状況は、男性グループは月1回が8割であるのに対し、



セナムトの教会でのミサ



九里 (クリ) 教会班集会

女性グループは毎週・隔週・月1回がほぼ同数であり、徐々に回数が増加しつつあるようだ。

## 2. 安仲教会の取り組み

\*安仲（アンジュン）教会は、水原教区に属する都会と農村の複合地域にある教会で、現在の周りの都市化が急速に進みつつある。信者数は4千2百人で、人口に対する信者率は6.5%である。

\*小教区司牧指針として「小共同体運動の活性化」を掲げ、2002年3月から全信徒に対する教育対応組織の機能強化、奉仕者の教育などを実施しながら、毎週火曜日は「小共同体の日」とするなど、精力的に取り組んでいる。

## 3. 参加者の感想文から・・・

### (1) 班集會に同席して

▼班集會の分かち合いの内容は靈的にとても深く、復活したイエス様の現存を感じました。分かち合いを聞く人も、温かいまなざしで真剣に受けとめていることが伝わって来ました。老弱男女が入り交じ

つての分かち合いが打ち解けてきていたことも、印象的でした。

▼次回の集いが待ち遠しいということ聞き、ほんとうに感心しました。班集會を重ねることに頂くお恵みが多くなる、ということも知らされました。

▼集會の初めに「小共同体の祈り」をして、3回目の聖書の朗読のときには全員が声を出して読んでいた。また、分かち合いの後には朗読箇所解説書も読んでいた。それぞれの班・小教区・教区で工夫が凝らされており、長崎教区なりのやり方ができると思った。

▼若い主婦が「楽しいから毎週参加している」と言っていたのは、単なるおしゃべりでなく、主を中心とした信仰の交わりができるからではないか。

▼韓国の信者たちは燃えている、と感じた。班集會を単なる祈りの会でなく、神から学びながら実践に移す場と考えているからだろう。

▼小共同体のことはよく分からな

い参加したが、実際にやっているのを見ると、自分たち高齢者にも十分できると思った。

▼主任司祭からの強い勧めで参加したが、班集會の実態をみて感動し、自分でも喜びを感じた。機会があればまた来たいし、周りの人にも参加を呼びかけたい。

### (2) 小教区・教区の取り組みを聞いて

▼主任司祭・修道者・信徒が一体となって取り組んでいる様子が伺



安仲（アンジュン）教会班集會

えた。農村地帯で各家庭が離れていても、車を持っている人が一緒に連れて行くなど工夫を凝らしていた。聖堂内にあった「真の福音化は小共同体の活性化から」という垂れ幕にその意気込みを感じた。

▼水原教区としての取り組みは、先発のソウル教区よりも10年くらい遅れたそうだが、その分だけ組織的・体系的に取り組めているように感じた。長崎教区でも、大司教様の方針を実現するための有効な手段として、ぜひ取り組んでいただきたい。

### (3) 求道者要理教育のための奉仕者の教育を見て

▼参加者たちが班長経験者であるせいか、パワーにあふれていた。これは、み言葉の分かち合いを中心とした班集會で活力を得ている自信から出てくるのではないか。

▼ソウル教区の司牧局長から「今後の教会活動は司祭が先頭に立つて進めるのではなく、司祭・修道者・信徒がチームを組んで当たる必要がある」というアドバイスがあったが、参考にしていきたい。

〈シリーズ〉共に生きる信仰

## パストラルケア

命に寄り添うケア(2)

もり かつし  
盛 克志レデンプトール会司祭  
(臨床パストラル・カウンセラー)

## 「創世記」に記された人間観

聖書の語る人間観は、次の聖句から見出すことができよう。「主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた」(創世記1・7)。つまり、人間は創られ生かされている存在であり、そしてその生命は「つながり」の中で生かされている、といった人

間観である。その命の核を、「スピリチュアル(心・霊・魂)」と呼んでもいいであろう。

## スピリチュアルな痛み

人間は、身体的、社会的、精神的、スピリチュアルな存在であると言われる。私たち人間は、たとえ肉体的には健康であったとして

も、さまざまな人生の苦難に直面した時には、心に痛みや苦しみを覚える。まして病気になるったり、死の淵に立たされることになった時の苦しみは、計り知ることはいかない。そのような時には、身体への配慮が必要であるのと同じように、スピリチュアルな痛みや苦しみに対しても配慮が必要になる。この配慮がパストラルケアの中心をなすものである。

## 心の架け橋(ラポール)

人間は誕生から死に至る人生の途上で、あるいはその中で体験するいくつかの通過儀礼において、たびたび、危機的状況を体験させられることがある。そして、それらの状態から自立して行くために、「隣り人となる相手」を求め続ける。

この「隣り人になる」という人間関係は未来志向性を持ち、一切の既成概念を離れて、新たな出会いを、感性においても体験においても基本前提とするものである。この「隣り人となる出会い」が、「ケア」のスタートである。パストラルケアの始まりにおける

積極的な出会いがまさしく、「ラポール」心の架け橋である。混沌とした状態の中で生き、感情などの表出ができなくなっている人が、援助者の暖かい姿勢に触れて、「この人なら私の心の内を聴いてくれるかもしれない」と感じ始めた時、その人の孤独な心は、援助者とながら細かい小さな関係を感じ始める。

その関係は、見え隠れしながら、次第にその人と援助者との心の架け橋を形成し始める。このラポールの基盤となるものが、相手に対する積極的・肯定的な信頼であり、相手の心の中に育ちはじめ、援助者への信頼感や好感である。

この関係の当初は、はつきりした自覚とはならないが、やがて援助者との関わりが深まるにつれて、「考えてみれば、あの時に心が開かれた」という感激として理解されるのである。エマオの途上の弟子たちが、主イエスとの出会いに気づかずに進みながら、やがて復活の主を認識した時に「互いに心が燃えた」ことを感謝を持って確認した関わりが、まさにラポールと言える。

## 「ケア」という言葉

それでは「ケア」とは何であろうか。「ケア」という英語は元々は「カラ」という古代ギリシャ語からきた言葉で、本来の意味は「他者を配慮すること」である。

いろいろな英和辞典を見ると、「ケア」には「心配」「関心」「注意」「用心」「配慮」「保護」「世話」「監督」などといった広い意味があることが分かる。このように多角的な意味があるから、日本語には訳しにくいので、「ケア(care)」という英語がそのまま用いられることが多い。

しかし、総合的に考えてみると、careという語が本来持っている意味には、「心配する」という日本語がひじょうに近いように思える。そして、「ケア」の内容には、「主体」と「対象」の二つの方向性があることも分かる。心配の対象が「自分自身」に向けられる場合には、気になる、思いわずらう、苦勞するなどの意味になるので、心の働きの方向性は自分の内面的働きに力点が置かれ、その結果、私

置かれると、何かについて配慮する、世話する、という意味になる。

「心配する」という行為が主体か対象かという違いが異なる意味を生み出すのが、「ケア」という言葉である。こうしてみると、「ケア」には心配する出来事と「ケア」される出来事とが同時に起きてくる。そういう意味において、「ケア」は同時的、共感的経験という特徴を持っている。

### 「ケア」がもたらすもの

パストラルケアの第一段階は、スピリチュアルな痛みや叫びを「聴く」ということである。人は本当に聴いてもらえた時に、慰めを感じるものである。自分の思いを口に出して言うだけでも、人の心は軽くなる。そして、相手に理解してもらえたと感じた時に、孤独感や疎外感から解放されて、深い慰めを実感する。そして、いろいろな抑圧感から解放されると、人は生きる意欲を回復する。永遠の今の視点から、生きる意味や目的を共に探し求め、自己の「存在」の意味を見出す。

また、罪責感、後悔などからの

解放も大きなテーマである。このような痛みは他人には小さく見え、本人には生命にかかわるほどの痛みであることが多い。そのようなものから解放されてくると、将来に希望を持つことができる。希望を持つと、すべての出来事を肯定的・積極的に受け入れる、生きる力が湧いてくる。

### 心を聴く

ケアの最初の段階においては、「聴く」ことが大切である。その場合、相手の表面的な状態を「聞く」のではなく、相手の内的世界、すなわち心の深みを、相手の言葉、気持ち、感情、願望に全面的に集中して「聴く」のである。具体的には次のような聴き方がある

#### \*外見を聴く

表情、目の動き、身体の動き、無意識のうちに示される相手の存在状況そのものが必ず何かを語りうとしている、と期待して聴き続ける。

#### \*言葉を聴く

いろいろな困難に直面している

人の言葉は必ずしも意味が明確ではなく、つじつまの合わないことも多い。そうした言葉の乱れを超えて、そこに表出されてくる内的世界を聴くように努める。文字通りの言葉の意味を聴くと同時に、言葉の奥にある状況を聴くのである。

#### \*沈黙を聴く

深い混乱や辛い葛藤は、沈黙という姿をとることが多い。その場合には、「拒否の沈黙」と異なつて、何らかの態度で訴えを継続し続ける。声にならない痛みや叫びを沈黙の中に聴きつくすことによつて、相手の心の混乱は次第に治まり始める。

このような具体的な出会いは、自分に与えられた人生を生きていることが重荷になったり、苦痛になつて自分を持てあましている人には、大きな出会いとなる。

自分自身をしっかりと受け止めてもらえたとき、「わたし」は本来の意味で生きるものとなる。人格的な出会い、それはその人の人生の価値観の土台となるものである。



典 礼

豆知識



＊先日、前教皇ヨハネ・パウロ二世「祈念ミサ」がありました。追悼ミサのところが分かりやすかったと思うのですが・・・

カトリック儀式書『葬儀』によれば、キリスト教には死者を「悼む」という考え方がないため、「命日祭」あるいは「祈念の集い」と呼ぶことになっています。そのため、先日のミサでは「祈念ミサ」という呼び方になりました。これからこのことが教会の中で定着していくと、信者でない方がたにもキリスト教の死のとらえかたをお伝えする機会になるでしょう。



＊「カテドラル」という教会があるようですが、これは何ですか。

カテドラルとは司教様の公の椅子（カテドラル＝司教座）のある聖堂のことで、司教座聖堂ともいいます。「東京カテドラル聖マリア大聖堂」といえば東京教区の司教座聖堂のことです。長崎教区では浦上教会聖堂がカテドラルです。祭壇に向かって右側奥にある特別の椅子が司教座で、背に高見大司教様の紋章が刻んであります。司教様がいないとき、この椅子は空席になります。



司教座

＊最近、大司教様がミサで使われている「聖体はいぶん大きく見えますが・・・」

初代教会時代、「パンを割る」とはミサを意味していました。ミサ司式者のホスチアが大きいのは、キリストの一つの体が聖体として皆に分けられることを表すため、また皆によく見えるためです。聖体拝領を最初になさ

る方々には、この大きなホスチアが分けられています。聖体の年を機会に、現在は直径20センチのホスチアを特別に焼いていただき、使っています。お皿（パテナ）も特注品です。

＊奉納のとき、パンとぶどう酒を運ぶのはなぜですか。祭壇の上に初めから準備して置けばよいと思うのですが・・・

パンとぶどう酒と水を運ぶ行為は「供えものの準備」といわれるもので、古代教会で典礼のためのパンとぶどう酒が家庭から運ばれてきていたことに由来すると考えられます。供えものの準備には典礼的な意味があり、司祭が唱える祈りのことばに表れています。この祈りは、神から頂いたものを感謝して祭壇の上に置く祈りです。ですから、「神よ、あなたは万物の造り主」の祈りが終わるまで、祭壇にはパンもぶどう酒も置きません。行列しない場合も、祭壇とは別の祭器台から運びます。ですから、行列をして運んだものを侍者が先に祭壇の上に置いてしまうのは、典礼的な意味を失わせるおそれがあります。

（嘉松宏樹）







# 自分(親)が変われば・・・



フリースクール ドリーム カム ホームに持ち込まれる相談は「子ども(不登校・摂食問題など)が問題を抱えていると来られる方(親)」・「自分自身が問題を抱えていると来られる方(若者・子ども)」の2つに分けられる。

◎子どもが問題を抱えていると相談に来られる親は「私は子どもが問題を抱えて苦しんでいるので心配である。子どもを愛している。だから自分を犠牲にして子どもの世話をしている。子ども思いの良い親である」と言われる。

親は子どもを愛し、幸せを願い、子育てをしている。しかし親が間違った愛を伝え、間違いに気づかずにいると、子どもは親から愛されているのに苦しみ、苦しみから逃れられず、自立できず、自分らしい人生を歩むことができない。親が子どもに間違ったことに気づき、対応・接し方を変えて正しい愛情を注ぐと、子どもは心豊かに愛をはぐくんで変化していく。子どものところに親の愛がはぐくまれば、人生でぶつかる苦しみや困難を乗り越え、人生を楽しみ、前向きに生きていく。子どもの未来に希望を持ち、子どもを信じ、確かな愛情を注いでください。

◎自分自身が問題を抱えていると相談に来られる若者は「家庭でも職場でもこころの居場所がない。人との間に壁があると安心できる。独りで過ごすのが一番いい」と言う。問題を抱えたときはどのように解決するのか尋ねると、問題は抱えていないと答える。しかし悩み、苦しんでいることは認める。

その悩みや苦しみは他人に原因があり、自分が問題を抱えていることは認めない。

乳幼児期に親子関係がきちんと結ばれないと人間関係が希薄になる。人は問題を抱えると家族や友人などに問題を背負ってもらい解決する。家族や友人に問題を背負ってもらうことで苦しみや悩みに耐えられ、見つめられ、解決できる。しかし人間関係が希薄なために問題を背負ってくれる家族や友人がいない。だから問題の解決を独りでしなければならない。独りで解決するのは苦しく、つらい。だから目をそむける。いつのまにか問題を抱えていることを忘れ、問題はこころの奥に静かに納まる。だから問題が表面に出ないのにこころの波(悩みや苦しみ)は収まらない。

◎「子どもの問題」・「自分自身の問題」。この2つのことは違うように映るかもしれませんが根本(親子関係・対人関係)は同じです。問題を抱えているから苦しいのではなく問題を抱えている根本(親子関係・対人関係)を認めないから苦しいのです。問題を解決するために「相手に変わることを要求せずまず自分が変りましょう。」そのために「まず自分自身を見つめてください。」乳幼児期から今日までの親子関係すなわち「親からもらうべき物(愛・こころ)の不足」と「親からもらうべきでない物(トラウマ)」などを整理してください。

また「問題を抱えたときは独りで苦しまないで誰かに相談してください」

(川井 健蔵・かわいけんぞう)



# 小教区 ピクアツフ

## 巡礼を続けて

### — 愛宕教会 —

毎年5月3日には津和野教会主催の乙女峠まつりが行われ、明治の初めに津和野に送られた浦上の信徒たちが、厳しい拷問を受けながらも信仰を守り通したことを思い起す日となっている。この日には、全国各地から大勢の方が当地を訪れているという。

長崎からは、愛宕教会の信者さんたちが毎年この巡礼に参加されているとのことなので、主任神父様に、この巡礼を行うようになったきっかけや、感想などを伺ってみました。

#### ◆ 巡礼を始めるようになった

きっかけは何ですか。

45年前に私が徳之島にいたとき、一人でこの巡礼に参加してみました。とても良い恵みの時となったので、これは教会全体で参加するのになさわしい巡礼だと思い、徳之島教会から3日がかりの巡礼を始めました。

愛宕教会では、私が主任司祭として赴任した27年前から、日帰りの巡礼を始めました。その後転任になりましたが、またこの教会に戻ってきました。そして、その間この巡礼がずっと続けられていたことを知り、たいへんうれしく思いました。だから、27年間も続けているということになるのです。

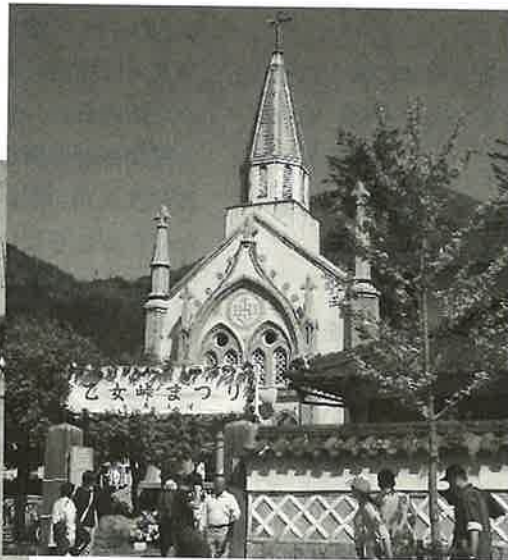
#### ◆ 乙女峠とはどのようなところですか。

明治の初めに「浦上四番崩れ」といわれる大迫害が起こった時、約3400人もの浦上の信徒が全国

22カ所に流され、およそ5年間にわたって、過酷な拷問を受けました。

このとき流された場所の一つが、津和野の乙女峠です。ここでは他の地に増して拷問のやり方が残酷だったことや、聖母マリアの出現があったという言い伝えがあるために、有名になったのです。

この素朴な浦上の信徒たちの不屈の信仰が、やがて日本に信仰の自由をもたらすことになったのですから、すごいですね。



津和野教会



町中での祈りの行列

#### ◆ その「乙女峠まつり」とは

どういうものなのでしょうか。

前日の5月2日には、乙女峠の少し下にある津和野教会で前夜祭があり、聖体賛美式が行われます。

当日の3日には、教会から乙女峠まで聖母行列が行われ、マリアさまの歌を歌い、ロザリオの祈りをし、町中を通りながら乙女峠まで祈りの行列となります。

乙女峠には小さな礼拝堂もありますが、この日は大勢の人が参加するので、野外ミサが行われます。今年も、溝部司教様の司式で、三末司教様、カンボジアから来られた司教様、それに神父様方も大勢参加されました。

ミサの後には、すばらしい自然の中で昼食をし、自由の他の場所を訪ねます。たとえば、山の斜面にきれいに整備された「留」をたどりながら、「十字架の道行き」をすることもできます。

#### ◆ 長崎から参加される意義などについて

「感想をお聞かせください。」

津和野に流されて行ったのは、長崎の浦上の信徒たちです。それなのに、この乙女峠まつりに長崎から誰も参加しないのは残念なことだと思い、毎年参加するようにしています。慰安旅行だったら一回参加するだけでもいいでしょうが、巡礼なので、何度もう行く意味や価値があると思っています。

日帰りなので、朝4時30分に出発です。ちよつときついです。それが、それも「巡礼」の意味が深められている一つだと思います。バスの中では、殉教者の話を聞き、聖歌を歌ったり、ロザリオの祈りをしたりします。今年も23名が参加しました。長崎からは他に、浦上、川棚教会からも参加していました。

これからも、巡礼を通していただく恵みの大きさに感謝しながら、続けていきたいと思っています。

# 宣教委員会

「全世界に行って、

福音を宣べ伝えなさい。」

(マルコ16・15)

このみ言葉に応えて、長崎教区には宣教委員会が設置されました。そしてはや第一期3年が過ぎ、第二期に突入しています。最初は、6部門をもって出発しました。国際協力部門・小共同体づくり推進部門・正義と平和推進部門・カトリック学校部門・カトリック施設部門・宣教研究部門です。その後、巡礼部門が立ち上がり、現在は7部門になっています。

「旅する教会は、

本質的に、宣教者である。」

(『教会の宣教活動に関する教令』2)

## 1. 宣教委員会のあり方

教会のすべての活動が宣教です。ですから、宣教のあり方には、いろんな可能性があるわけです。その様々な可能性を受け入れ、部門として育て、十分に成長できた時点で独立させていく、という任務をこの委員会が担っているような気がします。具体的例として、前年、巡礼部門が

♪ 主は  
われらの牧者  
わたしは  
とほしいことがない～♪



ら立ち上がった「TCA」という任意団体を挙げるができるでしょう。まだまだ理解されていない部分もあるようですが、現代における宣教の大きな役割を果たしていくことを期待しています。今では、「正義と平和推進部門」も独立できるほどに大きく成長しています。

## 2. 信徒とともに歩む

これまでの私たちは、宣教というと、司祭や修道者の専門の分野だと考えがちでした。たとえそのように考えなくても、実際には、司祭や修道者だけが、宣教についての会議をしたり駆け回ったりするのが現実でした。しかし、「全教会は宣教者であり、福音の宣布は神の民の根本的な任務である」(『教会の宣教活動に関する教令』35)ということを変更して確認していきたいと思っています。

教会とは、特別な役務者だけでなく、洗礼を受けたすべての人たちが共に育てていくものです。キリスト者みんなで、知恵を出し合い、協力し合い、話し合い、祈り合いながら進めていくのが宣教の姿であり、みんなで一緒に宣教に携わ

っていく時、すばらしい成果が生まれます。正義と平和推進部門などは、40人の信徒がメンバーとなって躍進している一つの例です。これからも、司祭だけではなく、修道者や信徒をメンバーに加えていくことが、大きな課題の一つです。司祭の数や力は限られています。信徒の数や力は膨大で偉大なものです。

## 3. その他考えるべき課題

①活動計画はすでに確定し、活動しなければならぬことが分かってはいても、実際に行動に移せていない面もあります。机上の宣教ではなく、社会の中での、生きた歩く宣教が求められます。もう一度、己自身(各部門)を省みたいと思います。

②さらに、己自身(各部門)の動きだけに終始するのではなく、長崎教区全体の動きや他の委員会の動きなどにも宣教的な示唆やアドバイスを行うことができるような存在に成長できることも願っています。

③社会に対しても、福音的影響力を与えることができる委員会にもならなければいけないでしょう。

④いろんなグループとの協力も必要になります。特に、宣教活動のための場所や機会に恵まれたグループの協力を仰ぎます。昨年より、カトリック幼稚園連盟も宣教委員会のメンバーとして代表を送ってくださったことになりました。カトリック学校教職員組合からの協力参加もお願いしたいと思います。

# 生活教会 の中の

## 東西に海

一九六六年十二月、完成。

五島灘を東に、  
雄大な東シ十海  
を西にのぞむ尾  
根の中腹に建つ  
曾根教会堂。

曾根は、山口大司教を迎え  
て落成祝いの喜びに包まれた。  
司祭と信徒の熱意と善意の  
実りだった。

その二年後の秋、大浦地

一八九九年秋、「長山」  
の地に、ペルー師の尽力に  
より木造の教会堂が建立さ  
れる。本堂は青砂ヶ浦の巡  
回教会として、永く信徒た  
ちの暮らしを支えた。

区とともに曾根小教区とし  
て独立し、その後、仲知小  
教区から、大水、小瀬良地  
区が編入され、現在に至っ  
ている。

切り通しの地形に建つ「曾

根」教会堂は、大自然の風  
雨に耐えながら、常に荒海  
を行く信仰者たちの道しる  
べとなっている。

六十数年後、竹山師と信  
徒たちは、新たに敷地を求  
めて、新教会堂の建設に取  
り掛かった。



曾根教会

フォトフラン 山本 富夫